

中学校への接続を見据えた小学校外国語教育

ー 英語の文字と音に焦点を当てて ー

学習開発分野 (18220902) 加 賀 竜 也

本研究では、小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語科(文部科学省, 2018)が外国語活動の課題として挙げている「日本語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係」について、フォニックスを用いることで改善を目指す。その課題に対して行ったカルタ形式のゲームは課題が見られるものの、発音と綴りの関係について一定の効果があったと考えられ、普段カルタを扱っていないクラスにおいては多数の児童が楽しさを感じられる活動であることが分かった。

[キーワード] 外国語教育, 英語の文字と音とのつながり, フォニックス, 英語カルタ, 動機づけ

1 問題と目的

平成 23 年度から全面実施されている外国語活動に対して、小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語科(文部科学省, 2018)では成果について「児童の高い学習意欲や中学校の外国語教育に対する積極性の向上といった成果が認められている」と述べられている。しかし一方で、課題について「①音声中心で学んだことが、中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない, ②日本語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係, 文法構造の学習において課題がある, ③高学年は, 児童の抽象的な思考力が高まる段階であり, より体系的な学習が求められることなどが課題として指摘されている」と述べられている。

本稿では、課題の中でも特に「日本語と英語との音声の違いや英語の発音と綴りの関係」について、中学校の教科書でも取り扱われているフォニックスを小学校の英語教育へ取り入れることで改善を図ることを目的とする。しかし、発音の法則などをただ指導するだけでは英語学習に対する意欲や積極性という成果を残すことは難しいと考える。そこで、現在の外国語活動の成果を活かしながら、課題へアプローチできるよう学ぶ意欲を高める授業実践を目指す。

2 先行研究に関する理論的検討

(1) フォニックス学習の概要と効果

松香(2008)で述べられているフォニックスの説明を筆者が表としてまとめたものが以下の表 1 である。

表 1 フォニックスのルール

ルール 1～26 Phonics Alphabet	A なら/æ/, B なら/b/, C なら/k/というように, アルファベット一つ一つには代表的な音があてられる。
ルール 27～31 Silent e	最初の母音を名前通り読み, 二つ目の e を読まない。
ルール 32～41 Polite Vowels	並んだ二つの母音のうち前を名前通り読み, 後ろを読まない。
ルール 42～49 Constant Digraphs	並んだ二つの子音が新しい一音になる。
ルール 50～57 Vowel Digraphs	並んだ二つの母音が新しい一音になる。
ルール 58～78 Consonant Blends	複数の子音が連続したときに, それぞれの音を残しながら混ざった新しい音になる。
ルール 79～84 Murmuring Vowels	母音に r がつくると混ざった新しい音になる。

加えて, 松香(2008)は平成 18 年度版の中学校英語教科書 6 種 18 冊に掲載されている語のうち, 7 割に対して MPI のフォニックス・ルールが当てはまるとしている。

(2) 生徒・児童の実態

ベネッセ教育研究所(2016)が行った「中高の英語指導に関する実態調査」では, 中学校の英語教員が生徒のつまずきの原因を挙げている。その中

でも、上位5項目の内、「単語(発音・綴り・意味)を覚えるのが苦手」(60.9%)と「文字や文章を読めない(文字から音にうまく変換できない)」(43.1%)の2項目は英語の文字と音のつながりが理解できないことから生じる原因と言える。このことから、英語の文字と音とのつながりは中学校と高等学校においてつまり原因の一つであり、それを小学校4年間の英語による言語活動の中で意識できれば改善を図ることができる考える。

また、文部科学省(2016)は「小学校外国語活動実施状況調査」において、小学校5、6年生の児童が英語の授業の中で楽しいと思うことについて「外国のことについて学ぶこと」(75.8%)、「日本語と英語の違いを知ること」(71.4%)、「英語で友達と会話すること」(66.6%)、「英語の発音を練習すること」(66.2%)を挙げている。これらを教材や指導に活用することによって、英語に触れる楽しさを大切にできると考えられる。

(3) 動機づけに関する調査

国立教育政策研究所(2002)の調査では、東京都品川区、同日之市、岐阜県美濃市及び同笠松町所在の小学生・中学生・高校生(計1400名)に対し学習意欲に関したアンケートを実施している。

その中で、学校において児童が勉強のやる気になる事例について「授業がよく分かるとき」、「先生にほめられたとき」、「授業が面白いとき」の3つを挙げている。それぞれ、児童の約9割が「とてもやる気になる」「やる気になる」と回答していた。この調査結果から考えれば、児童の頑張りに対してフィードバックをすることや、分かりやすい表現を用いたゲーム性のある活動が学習意欲を高めるためには必要であると考えられる。

(4) 小学校英語における文字の実践事例

フォニックスを導入した活動とそうでない活動を行った場合に、第5学年の児童がどれだけ英語の音と文字との結びつきを指導することでどれだけ認識できるかという加納(2005)の実践である。授業の中では、担任の先生とALTの先生がアルファベットの小文字を使った指文字作りや「A says a, a, a, apple. B says b, b, b, book…」と歌うチャンツ、ポインティングゲーム、カルタ形式のゲーム、フルーツバスケット形式のゲーム、発音された単語をアルファベットのカードで並べ作る活動などを行っていた。そして、活動の事前と事後に英語の音と文字との結びつきをはかるテス

トを実施している。ここで研究対象とされている第5学年の児童は英語活動を初めて4年目であったが、筆者の予想より高かったとしていた。

結果として、フォニックスを扱って授業をしたクラスとフォニックスを扱って授業をしなかったクラスとでテスト結果に有意な差が出たことから、フォニックスの活動が児童の音と文字とを結びつける能力を向上させたという研究結果を得ている。

3 山形市立A小学校における授業実践

(1) 本実践の目的と方法

以上の問題意識から、本研究は、小林(2007)を参考として以下のように3つの仮説を立て授業を実践し評価を行うことを目的にする。

仮説1：英語カルタを使用し、繰り返し英語にふ(わかる)れる機会を作れば、英語の文字と音とのつながりを理解できるだろう。

仮説2：友達との関わり方を指導し良い点を随時(つながり)指摘すれば、児童のコミュニケーションに対する意欲が高まるだろう。

仮説3：活動内容で、英語の文字と音のつながり(楽しい)を理解できる場や友達と関わる機会を作れば児童は英語の活動を楽しんでいることができるだろう。

研究方法として、仮説1については授業の導入で英語の発音に関するチャンツや授業の新出単語を用いた英語カルタを実施する。そして仮説2については英語を用いたクラスメイトとのやりとりを授業の中心的な活動として実施する。また仮説3については児童の生活に則した活動づくりや英語カルタを授業の導入に盛り込み指導する。

それら进行评估するため、仮説1については授業を实践する前と後に加納(2005)を参考としたリスニングテストを実施しその変化について考察する。テストの内容は主にチャンツの内容であるが、第5学年の授業で扱った単語をテストで用いた24個のうち6個導入する。仮説2、3については授業者である筆者の見取りとワークシートの自由記述による振り返りをもとに考察する。

(2) 対象学級の概況

筆者が教職専門実習Ⅱで授業を担当した山形市立A小学校では外国語科全面実施に先駆けテキストである「We can 1, 2」を用いた外国語科を实践している。授業の实践を行った第5学年の児童は今年から外国語科の实践をしており、第6学年

の児童は昨年から外国語科を実践している。

(3) 結果と考察

①仮説 1 について

表 2 各学年のリスニングテスト結果

	第 5 学年 (19 名)	第 6 学年 (18 名)
事前調査 (24 点満点)	平均 18.26 点	平均 18.16 点
事後調査 (24 点満点)	平均 19.15 点	平均 19.00 点

表 2 の結果から、両学年とも授業の前に行ったテストの 7 割 (16.8 点) を獲得しており高い得点であったことが分かる。特に第 6 学年は、授業で扱うことのできなかった単語がテストの中にあつたにも関わらず、第 5 学年で扱った単語についても解答することができていた。また、全体で見れば点数は大きく変化していないが、詳細を見ると点数の上がった子と下がった子が同時に存在していることが分かった。増減した点数の変化をまとめると、以下の図の通りである。この表から第 5 学年では 19 名中 10 人、6 学年では 18 名中 9 名とそれぞれ半数が点数を伸ばしていると分かる。

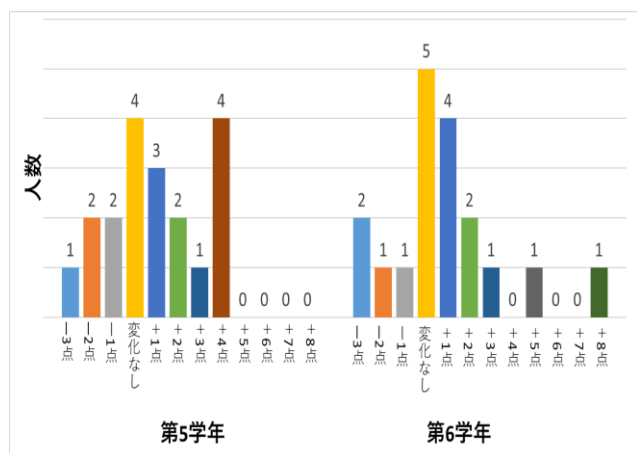


図 点数の変化と対応する人数の分布

間違いの多かった単語を見ると、dog の d を問われる問題で 5 学年 9 人 (47.3%) と 6 学年 6 人 (33.3%)、eat の e を問われる問題で 5 学年 13 人 (68.4%) と 6 学年 10 人 (55.5%)、lip の i を問われる問題で 5 学年 8 人 (42.1%) と 6 学年 7 人 (38.8%)、up の u を問われる問題で 5 学年 10 人 (52.6%) と 6 学年 15 人 (83.3%)、spend の d を問われる問題で 5 学年 8 人 (42.1%) と 6 学年 7 人 (38.8%) であった。これらの誤答は半分以上が同じ誤答をしており、dog の d を b と答えていたことや eat の e を i と答えていたこと、lip の i を

e と答えていたこと、up の u を a か o と答えていたこと、spend の d を b と答えていたことが分かった。これらのことから、小文字の b と d の区別、i と e の音の区別、a, u, o の音の区別のそれぞれが小学生にとって難しいと考えられる。以上のことを踏まえると、本研究の仮説では繰り返し英語に触れる機会に重点を置いていたが、b と d を扱う際や母音の文字と音とのつながりを扱う際には工夫が必要であることが分かった。

②仮説 2 について

自由記述の中からコミュニケーションの意欲に関する記述を書き出すと「クラスみんなのを聞いて、A さんが早起きですごいなと思いました。今日聞けなかった人にも聞きたいです」「いろいろな人にできなかった」「今していること以外にも前にしていたことなどを、表現することばを学習しこれから使っていきたいと思った」の三種類が挙げられた。本研究の仮説では教師からのフィードバックに重点を置いていたが教師からのフィードバックに関する記述は無く、やりとりの内容が「聞きたいもの」であることや身近な事柄について「新しい表現」を知ることがコミュニケーションの意欲に繋がっていたことが分かった。

加えて、コミュニケーションの意欲に関する記述が見られた人数を見てみると 5 年生で 3 人 (15.9%)、6 年生で 2 人 (11.1%) のみであった。授業の中で、時間になっても会話が終わらなかったことを考慮すると、コミュニケーションの意欲が低かったとは考えにくい。筆者が設定した自由記述という振り返りの形式が適切であったか再検討する必要がある。

③仮説 3 について

第 5 学年の自由記述の中でカルタを楽しいと書いていたのは 19 名中 14 名 (73.6%) であった。その中では「学びながら遊べて楽しい」という記述も見られた。カルタ以外の事柄について「楽しかった」「面白かった」と記述していたのは 7 名で、クラスメイトの答えの多様さについて 4 名、上手く英語を言えたことについて 2 名、英語を使うこと自体について 2 名、生活について扱ったことについて 1 名が楽しさや面白さを感じたと記述していた。

本研究は楽しさを大切にする意図からカルタを使用し、仮説においても友達と対話することやそのための練習に重点を置いている。これに対し

上記の結果から、英語カルタは5学年の中でも多くの児童が楽しいと感じることのできる活動であったことが分かる。そして、クラスメイトから情報を集めることや対話の前に上手く言えるよう練習すること、生活に根ざした内容について対話を行うことが児童の感じる楽しさや面白さにとって大切であることが分かった。

また、第6学年の自由記述の中でカルタを楽しんでいたのは18名中4名(22.2%)であった。これはカルタ形式のゲームがいつも行われている活動であったことから、自由記述に書くほど特別な楽しさを感じなかったのではないかと考えられる。カルタ以外の事柄について「楽しさ」に関わる記述をしていたのは12名であり、指導者が異なる中での授業について5名、修学旅行についてやりとりしたことについて4名、上手く英語を言えたことについて2名、英語のやり取りをメモ無しで行うことについて1名が楽しさを感じたと記述していた。

上記の結果から、特別カルタが面白いと感じることが無かったものの、クラスメイトが修学旅行で行った場所や食べたものを聞くことや対話の前に上手く言えるよう練習すること、児童が関心のある内容について対話を行うことが児童の感じる楽しさや面白さにとって大切であることが分かった。

4 全体的考察

(1) 本研究の成果

A 小学校ではフォニックスを用いた指導をしていなかったが、普段からALTの先生や民間の先生が入って授業をしているためか、よく答えることができていた。このことから、英語の文字と音との関係は外国語活動の中である程度培われていることが分かった。また、筆者の指導を経て点数の伸びていた児童が見られたことから、ある一定の効果があると考えられた。

(2) 今後の課題

仮説1について、カルタをただするのではなく小文字の綴りや母音の発音へ意識を向けることのできる工夫について検討する必要がある。

仮説2について友達との関わり方の良い点を随時指摘してはいたものの、意図や計画の無い関わりであった。コミュニケーションへの意欲を育むためには、意図や計画をもった指導や関わりが必

要であると考ええる。

そして仮説3について、カルタやクラスメイトとのやり取りを通して楽しさを感じている児童がいたものの、英語の文字と音とのつながりについて理解度が異なっていた。そのためカルタのペアを考慮し公正な活動にする工夫も楽しさを感じるためには必要であると考えられる。その上で、仮説2と仮説3で述べているコミュニケーションへの意欲や楽しさを測るためには、筆者が今回用いた自由記述という振り返りの形式を他のものに変更することが必要であると考えられる。

引用文献

- ベネッセ教育研究所(2016)「中高の英語指導に関する実態調査 2015」, <https://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=4776>
(最終閲覧日 2018 年 11 月 30 日)
- 加納由美子(2005)「小学校英語活動における文字の導入に関する実践事例—フォニックス法の活用について—」, 『2005 年度 兵庫教育大学大学院 学校教育研究科学位論文』.
- 小林君江(2007)「学ぶ意欲を高める小学校英語—友だちと楽しく学ぶ学習活動—」, 『神奈川県立総合教育センター長期研修員研究報告』
pp. 57-60.
- 国立教育政策研究所(2002) 学習意欲研究会
「学習意欲に関する調査研究」,
https://www.nier.go.jp/seika/seika0208_01/seika0208_01.htm
(最終閲覧日 2018 年 11 月 30 日)
- 松香洋子(2008)「フォニックスってなんですか？」
松香フォニックス.
- 文部科学省(2016)「小学校外国語活動実施状況調査」, http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1362148.htm
(最終閲覧日 2018 年 11 月 30 日)
- 文部科学省(2018)「学習指導要領解説 外国語活動・外国語」, 開隆堂出版.

Teaching Method of Foreign Language Education During the Elementary School Stage: Focus on Spelling and Pronunciation
Ryuya KAGA